

この作品は、「家庭経済設計」をテーマに、ある地方都市に住む40歳代の地方公務員の家族と彼らを取り巻く人々を通して、現在から将来に向けた「家庭経済設計」を考え、計画的に取り組んでいくことの大切さを訴えています。

「家庭経済設計」は、お金という現実的な数字を取り扱わざるを得ませんが、具体的な金融商品名や資金運用を勧めるような描写は避け、問題提起と動機付けを目的に制作しました。

ライフプランセミナー等での映像教材として最適な作品です。

あらすじ

原山次郎は市役所に勤める42歳。大手企業の地方支店に勤める妻の千絵、中学2年の娘・玲奈との3人家族だ。夫婦共稼ぎなので経済的には恵まれているが、それゆえ経済設計には無頓着な生活をしてきた。

そんな原山家に、ある朝サントがやってきた。原山の父・原山三汰、70歳だ。連絡もなく現れた父に原山は驚く。兄と同居しているはずのオヤジが突然なぜ？ いぶかしがりながらも出勤した原山だったが、「オヤジさん、最期の別れの挨拶に来たんじゃないか？」と職場の仲間に脅される。兄に電話しても繋がらず、自宅に電話しても三汰は出ない。いよいよ不安になった原山は早退して帰宅する。

が、実はその頃、三汰は暇つぶしの散歩中。公園で知り合った老人・日下部と仲良くなり、原山の家に連れて来る。日下部に会った原山は驚く。日下部は元市役所職員で、原山と同じ職場にいたこともあったのだ。聞けば、日下部は定年退職後、早々に妻を亡くし、老後の生きがいを見失ってしまったらしい。また定年後に備えた経済設計を現役時代に全く考えていなかったことも、その一因だと言う。寂しげに帰っていく日下部を見送る原山だったが、その晩、原山家にも突如として経済問題が湧き起こる。

妻・千絵が勤める支店が業務縮小のために閉鎖され、千絵は収入を失うことになったのだ。私立高校への進学を考え直してほしいと言われた玲奈はショックを受け、通訳になりたいという夢までも諦めかける。その様子を見ていた三汰は、原山と千絵に語りかける。

「玲奈の夢を叶えてやりたいと思うなら、そのためにはどんな経済設計が必要か、夫婦で考えてみりゃいいことじゃないのかね」その一言に気づかされた原山と千絵は、我が家の家庭経済設計を初めて真剣に見つめ直す。教育資金、生命保険、住宅ローン……自分たちが何も知らなかったことに驚きながらも、夫婦は次第に未来へのプランを描き始める。

そんな夫婦を微笑ましく見つめる三汰。

とそこへ、連絡の取れなかった兄から電話がかかって来た……。

